

佐賀城築城400年記念

歴代藩主 と 佐賀城

本丸
再建



Stories of feudal lord
and his family at Saga Castle

天守閣
焼失

能興行

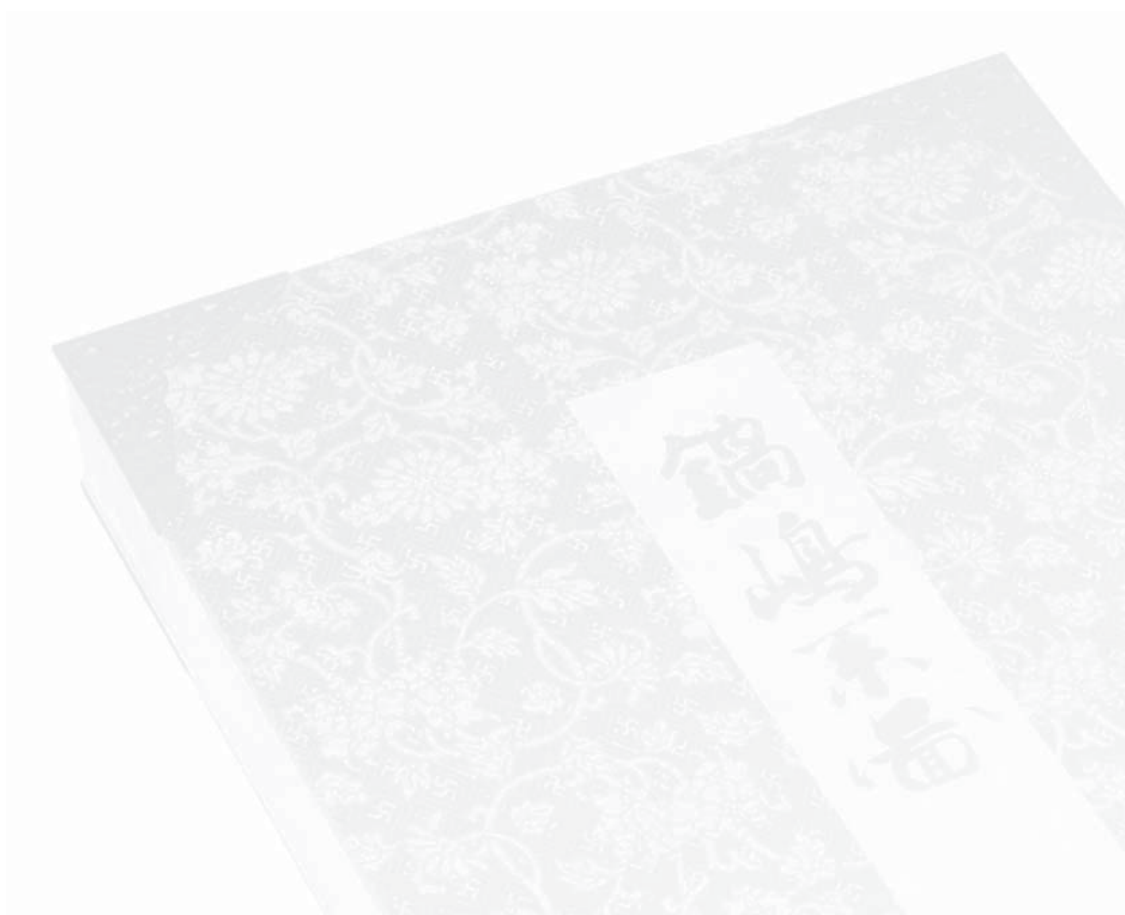
ごあいさつ

今年二〇一一年は、一六一（慶長十六）年に新築された佐賀城本丸御殿に初代藩主・鍋島勝茂が入城して四〇〇年の節目にあたります。これを記念した企画展「鍋島直茂・勝茂の時代」展（平成二十三年五月三〇日～七月三〇日）では、藩祖・鍋島直茂と初代藩主・鍋島勝茂父子による築城経過を辿りました。そこで、築城四〇〇年記念の第二弾となる本展では、二代藩主・鍋島光茂から最後の藩主十一代・鍋島直大まで、佐賀城で過ごされた歴代藩主と御一家をご紹介します。

藩主の年譜を中心とする文書類を読み解くことで見えてくる歴代藩主や御一家の佐賀城での暮らしぶりを、明治七年（一八七四）に佐賀城を舞台に起きた佐賀の乱などの戦災をくぐり抜けて伝来した鍋島家の品々を通じてイメージしていただければ幸いです。

平成二十三年九月二十六日

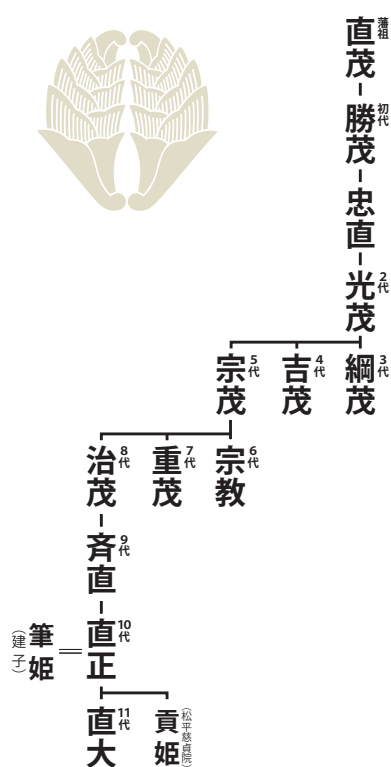
財団法人 鍋島報効会



目次

ごあいさつ	1
目次・凡例・略系図	2
図版	3
出品リスト	35

略系図



凡例

- この図録は、平成二十三年度文化庁「地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」として、財団法人鍋島報効会が主催し、平成二十三年九月二十六日(月)から十二月三日(土)まで徴古館において開催する「佐賀城築城四〇〇年記念 歴代藩主と佐賀城」展の解説付き総目録である。
- 資料の順序は各テーマに従って配列し、陳列の順序とは必ずしも一致しない。
- 資料解説の表記は、出品番号、名称、員数、時代・年代、作者(銘)・所有者、法量(単位はセンチメートル)、品質・形状、指定名称 解説の順に記した。
- 財団法人鍋島報効会が所蔵し佐賀県立図書館に寄託されている鍋島文庫資料については、その旨と請求記号を付した。
- 編集・執筆は財団法人鍋島報効会(主任学芸員 藤口悦子、学芸員 富田紘次、嘱託学芸員 宮原香苗)が行った。
- 図版の写真撮影は、久我秀樹(久我写真事務所)、株式会社とっぺん、富田紘次が行った。



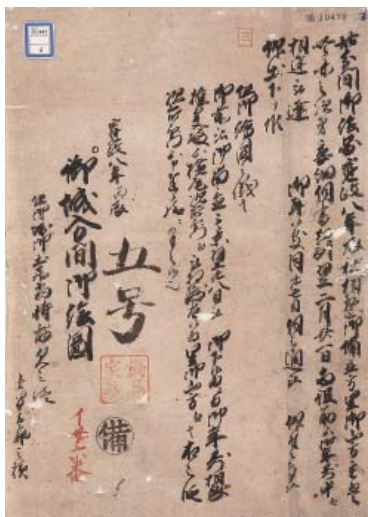
1 御城分間絵図

一 舗

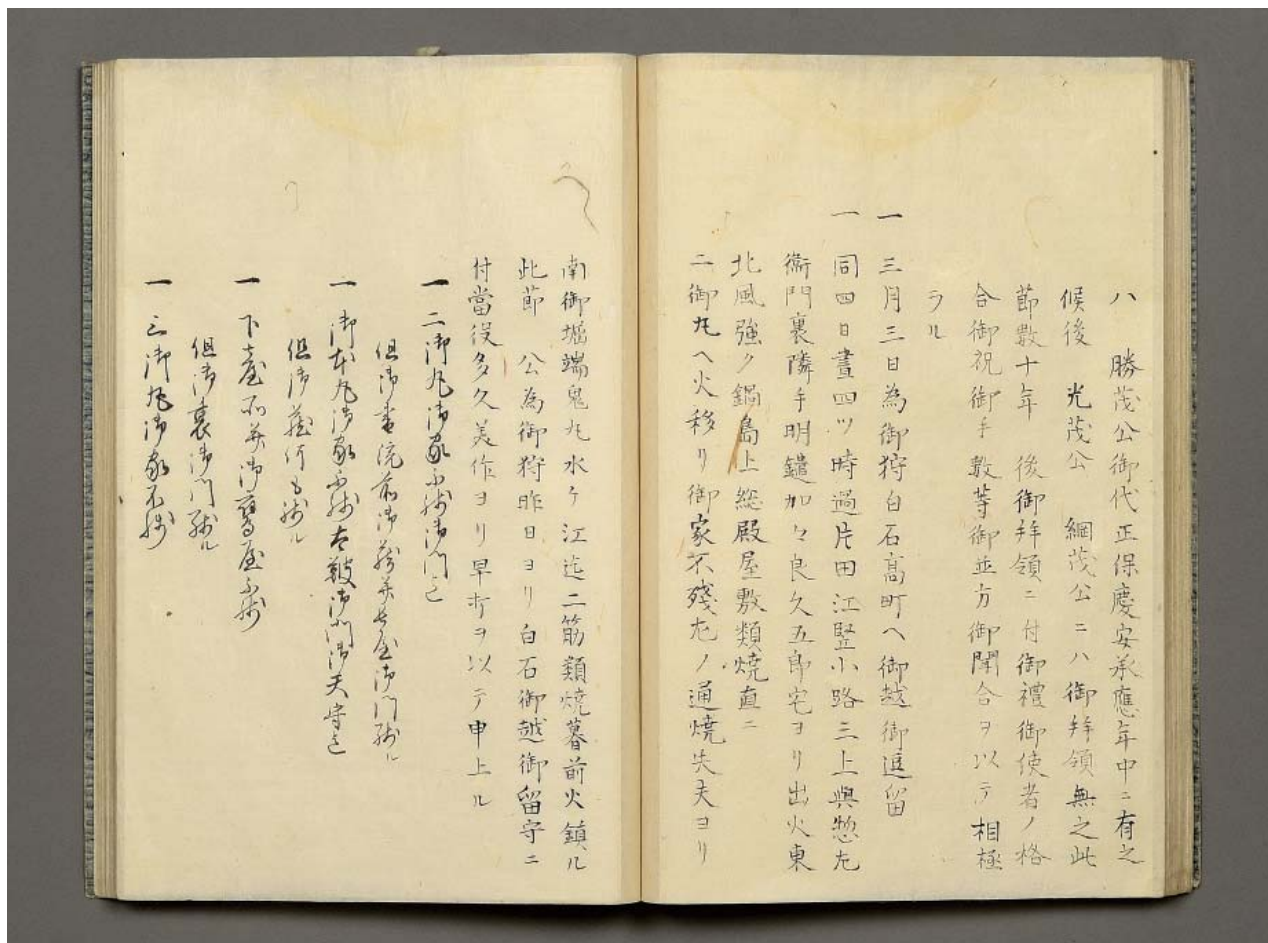
寛政八年（一七九六）
縦一五六cm 横一六六cm
紙本着色墨書

佐賀城は四周を広大な堀に囲まれた平城である。その堀幅は江戸初期には最も広い地点で五十間であった（寛永御城并小路町図）。ところが次第に土手を抑える板が朽ち始め、堀端の土が崩落し堀幅が広がっていった。そこで享保十九年（一七三四）、五代藩主・宗茂は「御開鑿之後百年有余二及び、岸々崩れたため幕府へ補修許可願いを出しており（年譜）、六代藩主・宗教が一部を修復したが財源を確保できず完遂しなかった。

それから数十年を経た寛政八年（一七九六）、八代藩主・治茂の時代、本格的補修のために作成されたのが本図である。堀幅補修にあたっては、初代藩主・勝茂が正保二年（一六四五）に幕府へ提出した城絵図（現存せず）が基準とされており、現状の絵図上に朱線で「正保二年公儀上り御絵図御堀幅」が示されている。また局地的に現状と正保期における堀幅が注記されているが、中には五間近く広がっている箇所もある。このほか護岸の石組や樹木、城内各所の堀や門などの表現も詳細で、城下絵図や文献資料では分からない佐賀城の詳細を知ることができる好資料である。



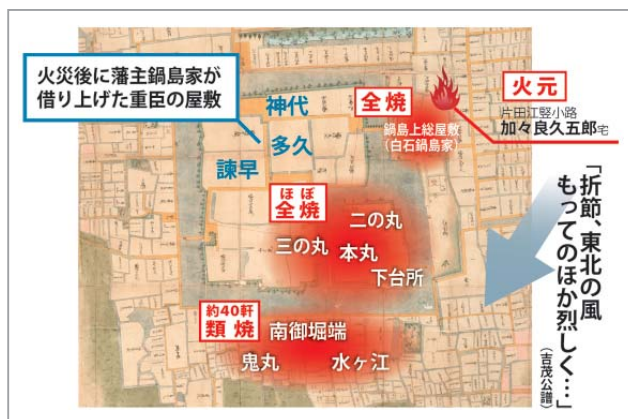
表紙



3 吉茂公御年譜 卷六 一冊

文政二年（八一九）
竪二六・三 cm 横二八・七 cm
紙本墨書 冊子装
鍋島文庫 一三・八

四代藩主・吉茂が前日から白石へ狩りに出かけ佐賀城を留守にしていた享保十一年（一七二六）三月四日の昼四ツ時すぎのこと。火元は佐賀城東の武家屋敷街である片田江堅小路に借家住まいをしていた加々良久五郎宅（かたまたえ）だ。火の手は「東北の風、以てのほかに烈しく」、四十間堀と称された広大な城堀を越え城内に飛び火した。その結果、天守閣・本丸御殿の焼失をはじめ、本丸・二の丸・三の丸はいずれも「御家残らず」ほぼ全焼し、さらに火の手は南堀を越えて武家屋敷約四十軒に類焼。火が鎮まったのは日暮れ前、藩主の帰城は翌日のことだった。

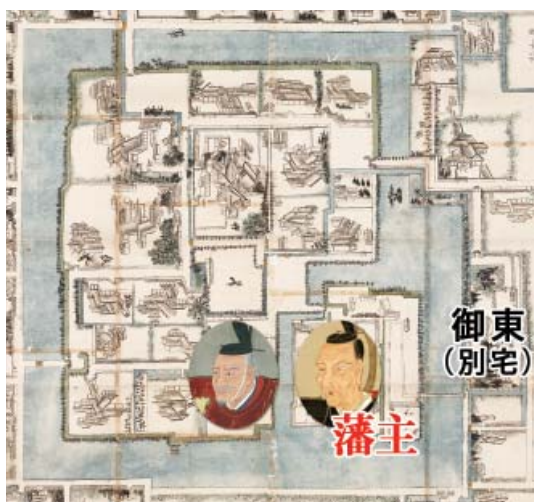


享保火災の類焼範囲 絵図は元文佐賀城廻之絵図／元文5年(1740)

藩祖直茂・初代勝茂 — 江戸時代初期

本丸御殿は、今からちょうど四〇〇年前の慶長十六年（一六一一）に完成し、初代藩主・勝茂が入城した。三の丸には藩祖・直茂夫妻が居住した時期もあったが、やがて多布施に隠居し、元和四年（一六一八）に没した。のち、寛永十五年（一六三八）には、天草・島原の乱から帰陣した鍋島家の面々は高伝寺で直茂の位牌へ戦勝報告の後、元茂勝茂長男・小城鍋島家の祖は西の丸へ、直澄（勝茂三男・蓮池鍋島家の祖）は三の丸へ、そして藩主勝茂は本丸へ入っている。

慶長十三年（一六〇八）の佐賀城総普請に先立ち、慶長十年（一六〇五）には本丸・二の丸から堀を隔てた東側に、「御東」という別宅が建設された。ここで藩祖・直茂はたびたび家臣たちを召し出して「夜咄」を語り聞かせることもあった。勝茂も、その泉水に泳がせる鯉二〇〇匹の捕獲を成富兵庫茂安に命じ、島原の乱帰陣後には風通しの悪い本丸を避けて御東で納涼するなど、「リゾート」施設として殊のほか気に入っていた。



佐嘉小城内絵図 江戸時代初期（慶長年間）

二代光茂・三代綱茂 — 元禄九年（一六九六）頃

寛文二年（一六六二）二代藩主・光茂は、御東に向陽軒御社を建て、貞享四年（一六八七）には「光茂公ならびに御子様方、向陽軒御屋敷へ移」って「東御屋敷」と称し、「御政務の節は、時々御本丸に於て聞召」した（綱茂年譜）。元禄八年（一六九五）、藩主の座を三代藩主・綱茂に譲った際には本宅として本丸・二の丸を譲り、翌年、隠居後初めて江戸から佐賀に戻った光茂はすぐに東御屋敷に入った。

それに対し三代藩主・綱茂は元禄十一年（一六九八）西御屋敷（大名庭園「観願荘」）の造営を命じ、ここで政務をみることもあった。「御本丸御普請二付御逗留十二月二十一日、陸ヨリ帰城」（年譜・元禄十三年十一月二十六日条）とあり、本宅である本丸造営に伴い一時的に西御屋敷を利用していた時期もあったようだが、あくまで納涼など余暇を過ごす場として御東を利用していた初代・勝茂の時代とは別宅の使い方がやや異なっている。



元文佐賀城廻之絵図 元文5年(1740)

四代吉茂 — 十八世紀前半

西御屋敷（観願荘）を好んだ三代藩主・綱茂が宝永三年（一七〇六）に没した翌年、四代藩主・吉茂は西御屋敷を解体して藩士に拝領せしめ、残存部分も石火矢の稽古場として使われる程度で、別宅としての機能は薄らぐ。年譜には「綱茂公までは御本丸御住居、公（吉茂）は二御丸御住居なり」とあり、宝永五年（一七〇八）、家督相続後はじめて入部した際も二の丸に入っている（このとき本丸には、綱茂子女のうちただ一人存命中だった伊勢峰が住居）。その後も吉茂は二の丸を政務の場としていたが、こうした中、享保十一年（一七二六）の火災で本丸・二の丸・三の丸がほぼ全焼。住まいを失った吉茂は二年後に二の丸を再建するが、一時的に多久屋敷・諫早屋敷、さらには神代屋敷を借上げ、中でも多久屋敷・神代屋敷は、この数十年に渡り、長らく隠居や世子の住まいとして利用されることとなる。



元文佐賀城廻之絵図 元文5年(1740)



享保火災後の佐賀城内がわかる 寛政8年(1796) 御城分間絵図

享保11年(1726)の火災で居所・政務の場所を失った4代藩主・吉茂は、城内に所在する重臣屋敷地を一時的に借上げた。「二御丸普請の間」(『吉茂公譜』)と、当初は期限付きだったようだが、世子や御隠居の住居として使用し、神代屋敷の返還は宝暦11年(1761)、多久屋敷の返還は安永9年(1780)のことだった。

寛政8年(1796)、8代藩主・治茂が城堀改修を目的に描かせたこの絵図からは、二の丸・三の丸が再建され、重臣屋敷を返還し終えた時期の城内の様子を確認できる。

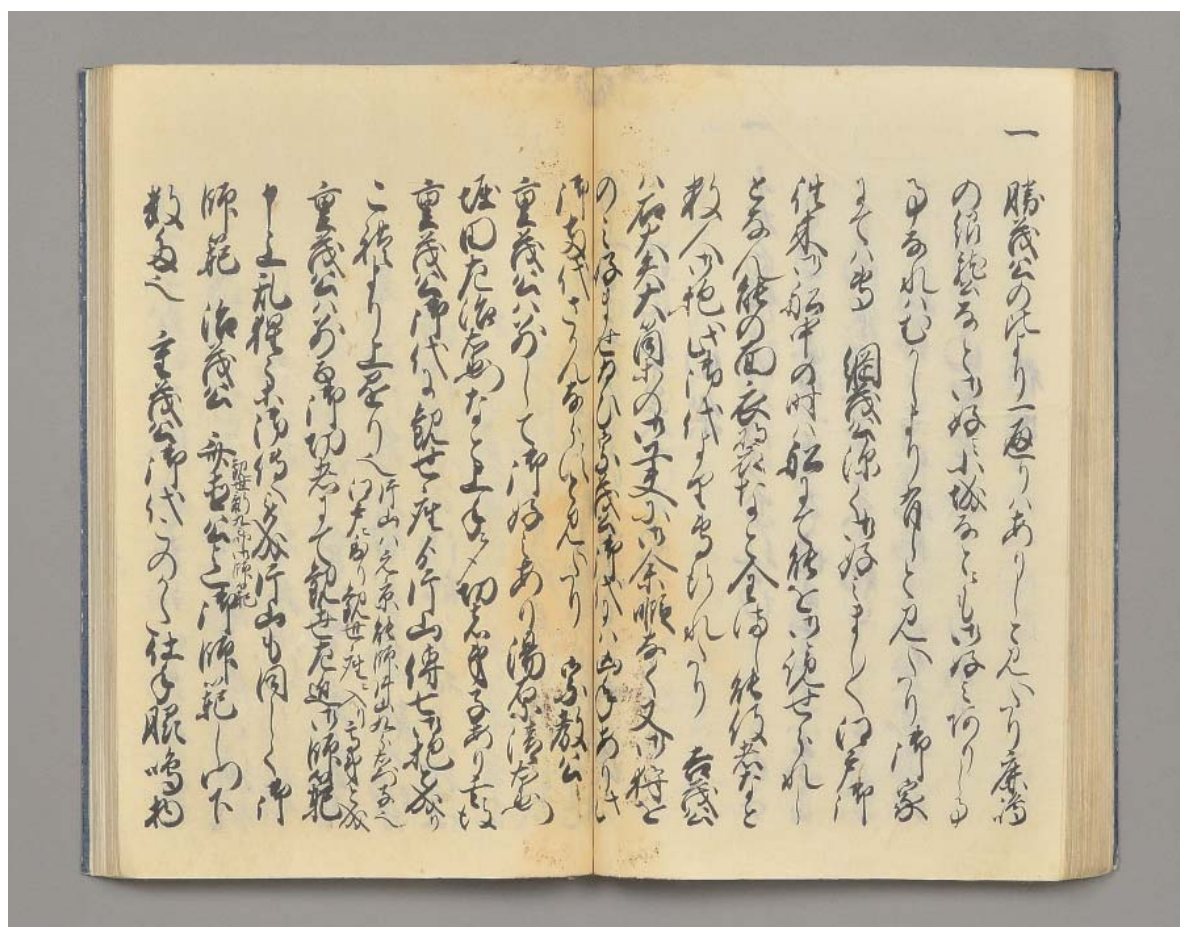
多久屋敷(北之丸)

享保11年(1726):佐賀城焼失→4代吉茂が借上げ
元文2年(1737):世子宗教の住居として借上げ
寛保2年(1742):5代宗茂の隠居住居となる
宝暦4年(1754):5代宗茂没
宝暦6年(1756):三の丸を再建し、多久家へ返還
宝暦11年(1761):6代宗教の隠居住居となる
安永9年(1780):6代宗教没し多久家へ再返還

神代屋敷(北御屋形)

享保11年(1726):佐賀城焼失→4代吉茂が借上げ
寛延2年(1749):世子重茂の住居として借上げ
宝暦11年(1761):重茂が7代藩主に就任し、神代家へ返還





6 雨中の伽うちゅうのが

一冊

文化九年(一八二二) 自序
堤範房著
縦二五・〇cm 横一六・六cm
紙本墨書 冊子装
鍋島文庫〇七〇・一二

佐賀藩での文武について、九代藩主・斉直なりなおの時代までの藩主の嗜み具合や藩内での流行などを記している。文(文学・楽・書・画・和歌・連歌・俳諧・猿楽・茶道・生花・琴・三味線・歌舞伎など)、武(兵法・弓術・鎗術・剣術など)について四十八項目と附録からなる。

能(猿楽)については、初代藩主・勝茂の時代から一通りは行われていたが、特に三代藩主・綱茂が深く好んだ。綱茂は参勤交代の船内でも能を観覧し、能面や能衣装を全備し、能役者も数人抱えたのも綱茂の時代からのことという。六代藩主・宗教しんぎょう、七代藩主・重茂しげもも好みで、重茂お抱えの片山傳七は八代藩主・治茂、九代藩主・斉直なりなおまで師範した。歴代藩主による能の嗜みは、各代を通じて概ね盛んであったようである。



片山傳七屋敷地 片田江堅小路東側六番
文化御城下絵図／文化年間(1810年頃)



白繻子地花車鉄線模様縫箔

一領



江戸時代（一七～一八世紀）
丈二四四・五cm 桁六七・五cm

〈前期展示〉

豪華な刺繍文の縫箔は、女性役の衣裳。白繻子地に金箔で霞文を摺り込み、鉄線唐草の中に松、牡丹、杜若、菊、紅葉など四季の花木が花車を飾っている。襟が黄変するなど実際に使われた痕跡がある。裏地は紅平絹。三代藩主・網茂所用と伝える。



17

洞箔地花車散銀杏模様縫箔

一領



江戸時代(二八世紀)
丈一四九・八cm 袖六八・〇cm

〈後期展示〉

枝垂桜と牡丹を載せた源氏車。また、大きな銀杏の葉は神域からの届け物を意味するのであろうか。ついつい物語世界へと誘われる作品である。「御能御面其外御道具(資料No.10)によれば、「御洞箔 地金牡丹桜鴨脚車縫模様」と記されている。鴨脚は銀杏の別称だが、この大きな銀杏の表現は、将に鴨の足に見立てたくなるのも頷ける。裏地は緋練絹。三代藩主・綱茂所用と伝わる。

20 五十首和歌并飛鳥井雅豊卿追詠一帖

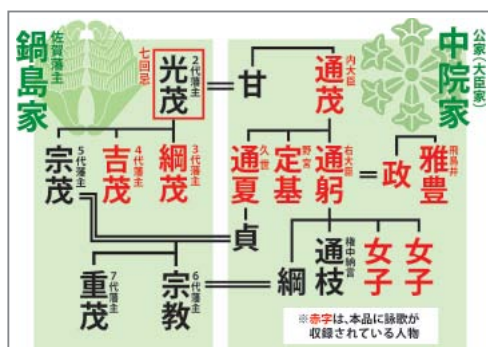
宝永三年（一七〇六）
 竪四〇・五cm 横一〇・八cm
 彩箋墨書 折本装

二代藩主・光茂七回忌の追善のため、三代藩主・綱茂が中院家を通じて京の公家衆に依頼し、法華の経題を用いて詠まれた和歌短冊を手鑑にしたもの。折本の銀製金具は牡丹に蝶、鳥を彫出する。

歌人としても知られ、二代光茂継室の甘姫の兄にあたる中院通茂を筆頭に京の公家衆、三代・綱茂自身、弟の矩茂（のちの四代・吉茂）ら計五十人の詠歌が収録されており、さらに飛鳥井雅豊による追詠和歌一葉が添えられる。筆頭の中院通茂の子息で、のちに娘の貞が五代藩主・宗茂に嫁する久世通夏、娘の綱が六代藩主・宗教に嫁する中院通躬も詠者五十人に含まれている。鍋島家と、中院家をはじめとした公家衆とのつながりを物語る貴重な資料。五十首法華経題と作者を記した折紙付き。



飛鳥井雅豊卿追詠



関係略系図

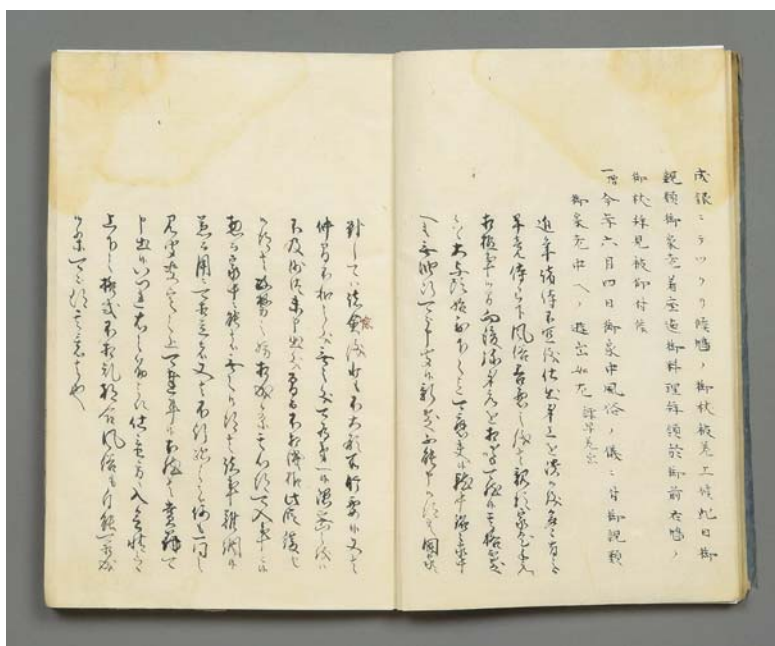


銀製金具



22 光茂公譜考補地取 卷三 一冊

天保十五年（一八四四）
 縦二五・七cm 横一八・二cm
 紙本墨書 冊子装
 鍋島文庫一三三・一三



元禄四年（一六九一）五月二十三日、二代藩主・光茂の六十賀を祝し、のちに三代藩主となる嫡男綱茂は「銀細工鳩ノ御杖」を贈呈し、親類・家老・着座の家格を有する諸家には御料理の拝領と、光茂の御前で御杖の拝見があった。この杖は現在には失われているが、四代藩主・吉茂伝来の木製鳩の杖（資料No.23）が現存している。

23 鳩之杖 一本

四代藩主・鍋島吉茂 伝来
 江戸時代中期
 全長一一四cm
 竹製



四代藩主・吉茂伝来の、先端に木彫の鳩をつけた竹製の杖。鳩は食するとき咽（のど）せない鳥であるとして、これにあやかるため老人用の杖の握りの部分に鳩をつけたとされる。本品の鳩は木製であるため、二代藩主・光茂六十賀に嫡男の綱茂が贈った「銀細工鳩ノ御杖」とは合致しないが、吉茂も六十七歳と長寿だったため、本品も家族からの贈りものかもしれない。





26 龍造寺系図

一帖

享保元年（一七一五）浄書 享保三年（一七二八）装丁
 縦三六・二cm 横二四・三cm
 紙本墨書 折本装

27 鍋島系図

一帖

享保元年（一七一五）浄書 享保三年（一七二八）装丁
 宝暦三年（一七五二）まで書継ぎ
 縦三六・三cm 横二四・四cm
 紙本墨書 折本装

菱形に巾を織り出した上に宝相華文をデザインした布を表紙に貼り、四隅には家紋入りの唐草金具を配した見事な装丁である。龍造寺系図の裏表紙紙背には、「享保三
 戌 歳 十一月吉日造之 京都室町通松原上ル町 若井
 利左衛門」の墨書がある。享保元年（一七二八）に完成を
 みた両系図は、高伝寺大涅槃図を模写し佐賀へ納めるの
 に尽力した京都の経師屋・若井利左衛門の手になる。
 のちに五代藩主となる宗茂が十七歳から十五年をかけて
 製作した両系図は、年譜（資料No.25）に「古今之士庶、親
 疎・遠近・貴賤を扱はず、老若男女・僧尼の輩、皆悉く筆記
 す」とあるように、充実した内容である。本家は金線、分
 家は赤線、分家の分家は黒線の色分けがなされ、以後宝
 暦年間まで書き継いでいる。



龍造寺系図 裏表紙紙背



31 唐蠟石筆架



32 蠟石筆洗



33 紫圓硯石

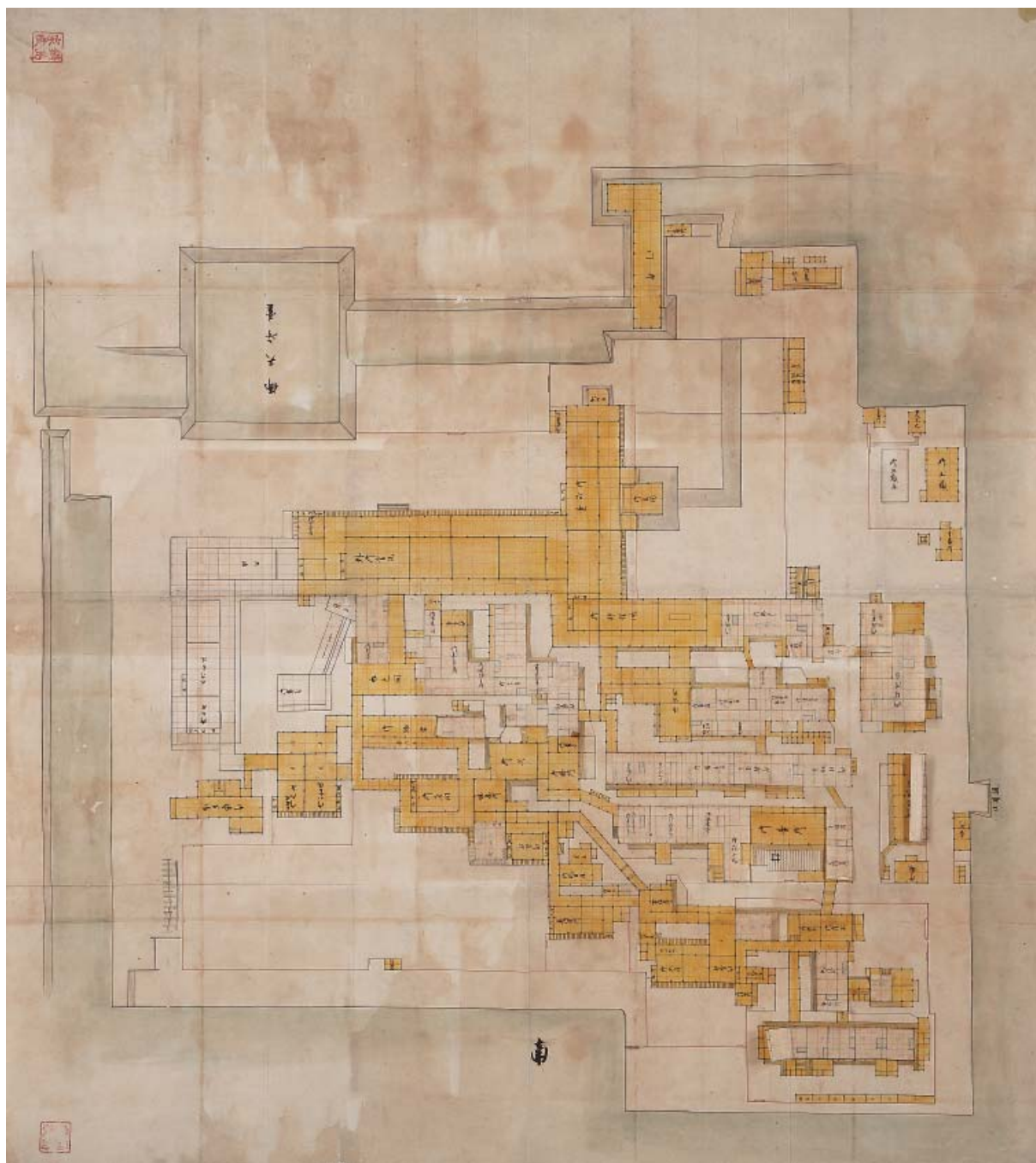


34 龍鳳飭墨

吉茂所用文房具

江戸時代
四代藩主・鍋島吉茂所用(高伝寺返納品)

やわらかい蠟石を彫り、中国の風物を巧みに表した唐物の筆架と筆洗、また「文房四宝」の一つとして愛玩されたであろう紫円硯、龍鳳を彫った墨のいずれも四代藩主・吉茂所用のもの。菩提寺の高伝寺に納められたが、大正時代に鍋島家へ返納された。



36 佐賀城御本丸差図 一鋪

天保六年（一八三五）
竪一四〇cm 横一二四cm
紙本彩色墨書

天保六年（一八三五）五月十一日の火災から半月後の二十八日、十代藩主・直正は早くも再建方針を述べている。それによれば、「総て、日峯様（藩祖・直茂、泰盛院様（初代藩主・勝茂）御心力を尽くしなされ、御天守其外御築き置かれ候処、享保御火災後御再興御行き届か」なかつた。そのため、「以前の通り、御天守・櫓をも御建て」、すなわち本丸御殿のみならず天守閣も再建する旨を述べ、差図の取立てを命じている（年譜）。

十一月十一日には、「御城普請御差図」について、請役所と目付方は二の丸に設置すべきとの先代藩主・斉直の見解と、両役所は業務上、密に連絡をとる必要があるため、差図通りにしたいとの直正の見解の調整がはかられているが（鍋島文庫〇二一・二五「日記 御年寄手許」）、その図が現存する本品であろう。請役所などの行政機能を本丸に取り込む再建計画が練られていたことがわかる。なお、本丸御殿や現存する鯨の門などには間取りが記載されているが、天守は「御天守台」とあるだけで、実際に再建されることはなかった。平成十六年（二〇〇四）に再建された県立佐賀城本丸歴史館は、本図をはじめとする文献資料や発掘成果に基づき、その一部を復元した建物である。

筆姫所用 御道具

文久三年（一八六三）四月十二日に佐賀城三の丸に入城した筆姫所用の御道具。
実家である田安德川家の葵紋や、鍋島家の杏葉紋があらわれている。

40 黒漆塗葵紋行器

江戸時代後期（一九世紀）
高四九・九cm 口径四二・三cm
木胎漆塗蒔絵
十代藩主・鍋島直正夫人筆姫所用



一対

41 黒漆塗葵紋食籠

江戸時代後期（一九世紀）
高三〇・五cm 口径三六・九cm
木胎漆塗蒔絵
十代藩主・鍋島直正夫人筆姫所用



一対

42 黒漆塗杏葉紋盥・湯桶

江戸時代後期（一九世紀）
（盥）高二〇・二cm 口径五一・二cm
（湯桶）高十九・四cm 蓋径二二・二cm
木胎漆塗蒔絵

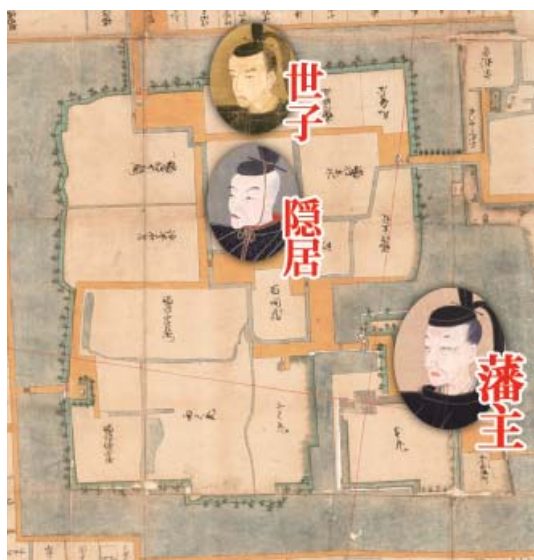


三点

五代宗茂・六代宗教・七代重茂

—寛延二年(一七四九)頃

五代藩主・宗茂の嫡男として江戸溜池屋敷に誕生した七代藩主・重茂(右平太)は、寛延元年(一七四八)十七歳の時、兄・宗教の養子となり、翌年五月十三日に嗣子として初入部する。その時の住まいは、「重茂公御年譜」によると、「先づ二御丸に入りなされ殿様(六代宗教)と御面談、それより北御丸に入りなされ、大殿様(五代宗茂)御始め御兄弟中様へ御面談、七時ころ北御屋形に入らせらる」とあり、「北御屋形」とよばれた神代屋敷を宝暦十年(一七六〇)藩主に就任するまで住居とした。またこの記事から、二の丸には六代藩主・宗教、北の丸には隠居の五代藩主・宗茂が住居していたこともわかる。



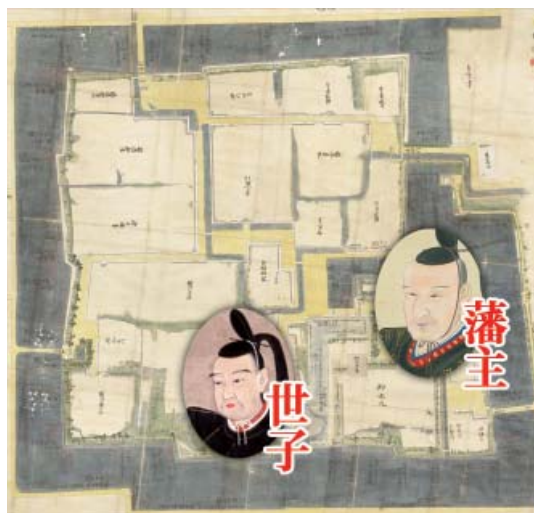
元文佐賀城廻之絵図 元文5年(1740)

八代治茂・九代斉直

—寛政七年(一七九五)頃

八代藩主・治茂(直熙)は佐賀城北の丸で誕生し、はじめ支藩・鹿島鍋島家の養子となり、宝暦十三年(一七六三)に家督を相続した。ところが明和七年(一七七八)、兄・重茂が三十八歳で逝去したため急ぎよ本藩を相続して二の丸に入った。寛政二年(一七九〇)には二の丸表御門を、櫓門形式の鯨の門に建替えている。

次の九代藩主となる斉直(祥太郎)が安永九年(一七八〇)に誕生したのも二の丸である。寛政四年(一七九二)六月、十三歳のとき嫡子に定められ、これまでの部屋住みを解消して新居の三の丸に移り住んだ。寛政七年に正式に嫡子届出が済み、若殿様と呼ばれる。また、のちには兄弟たちも三の丸に移り住む。



御城分間絵図 寛政8年(1796)

十代直正・十一代直大

—十九世紀半ば〜後半

九代藩主・斉直の嫡男として江戸桜田屋敷に誕生した十代藩主・直正(貞丸)は、天保元年(一八三〇)十七歳の時に家督を相続し、江戸を發つて閏三月二十八日に佐賀城二の丸へ着城した。一方の斉直(大殿様)は六月八日、かつて世子の時代に住居した三の丸に移り、その後、天保五年に出府して江戸溜池屋敷に住まい、天保十年に逝去した。

直正は天保六年五月、二の丸焼失に遭い、本丸を再建する同九年までは三の丸に住居した。十一代藩主となる直大(淳一郎)は弘化三年(一八四六)八月に御部屋で誕生。嫡子届出で若殿様となる。文久元年(一八六一)の藩主交代で、十一代直大は本丸へ、直正は三の丸に住居した。文久三年に江戸から佐賀へお越しの直正継室・筆姫も増築なった三の丸で明治四年(一八七二)まで過ごされた。



文化御城下絵図 文化年間(1810年頃)

No.	名 称	員数	時 代・年 代	法 量 [単位:cm]		備 考
1	御城分間絵図	1鋪	寛政8年(1796)	縦156	横166	複製パネル展示
2	泰国院様御年譜地取	1冊	江戸時代後期	縦26.3	横18.6	鍋113-補28
3	吉茂公御年譜 巻六	1冊	文政2年(1819)	縦26.3	横18.7	鍋113-8
4	吉茂公御年譜 巻下	1冊	文政2年(1819)	縦26.3	横18.4	鍋113-9
5	重茂公御年譜 巻一	1冊	江戸時代後期	縦26.6	横18.7	鍋113-67
6	雨中の伽	1冊	文化9年(1812)自序	縦25.0	横16.6	鍋070-2
7	重茂公御年譜 巻四	1冊	江戸時代後期	縦26.7	横18.7	鍋113-67
8	重茂公御年譜 巻七	1冊	江戸時代後期	縦26.4	横18.7	鍋113-67
9	御能御面其外帳	1冊	天保14年(1843)	縦26.6	横18.8	鍋072-3
10	御能御面其外御道具	1冊	天保14年(1843)	縦25.7	横17.0	鍋072-2
11	御能次面衣裳道具帳	1冊	天保14年(1843)	縦26.8	横18.0	鍋072-1
12	御譲御面	1冊	江戸時代後期	縦27.0	横18.8	鍋072-5
13	紺地網代唐花模様単狩衣	1領	江戸時代(18世紀)	丈160.0	衿100.0	前期展示
14	白縹子地花車鉄線模様縫箔	1領	江戸時代(17～18世紀)	丈144.5	衿67.5	前期展示
15	胴箔地忍草散紅葉模様腰替縫箔	1領	江戸時代(17世紀)	丈151.0	衿67.0	前期展示
16	紅縹子地鱗花入大鱗模様腰替箔	1領	江戸時代(18世紀)	丈151.0	衿67.0	後期展示
17	胴箔地花車散銀杏模様縫箔	1領	江戸時代(18世紀)	丈149.8	衿68.0	後期展示
18	紺地茗荷花菱亀甲丁子唐杉山模様袷狩衣	1領	江戸時代(19世紀)	丈147.5	衿101.0	後期展示
19	綱茂公御年譜	1冊	文化11年(1814)	縦27.0	横20.0	鍋113-6
20	五十首和歌并飛鳥井雅豊脚追詠	1帖	宝永3年(1706)	縦40.5	横10.8	3代藩主鍋島綱茂 伝来
21	黒漆塗宝相華唐草蒔絵箱	1合	宝永3年(1706)	高15.0 縦46.0	横17.0	3代藩主鍋島綱茂 伝来
22	光茂公譜考補地取 巻三	1冊	天保15年(1844)	縦25.7	横18.2	鍋113-13
23	鳩之杖	1本	江戸時代中期	全長 114		4代藩主鍋島吉茂 伝来
24	撞杖	1本	江戸時代前期(17世紀前半)	全長 76.5		初代藩主鍋島勝茂 所用
25	宗茂公御年譜 巻乾	1冊	江戸時代後期	縦26.2	横18.5	鍋113-50
26	龍造寺系図	1帖	享保元年(1715)浄書/享保3年(1718)装丁	縦36.2	横24.3	
27	鍋島系図	1帖	享保元年(1715)浄書/宝暦3年(1751)まで書継ぎ	縦36.3	横24.4	
28	宗茂公御年譜 巻二	1冊	江戸時代後期	縦26.2	横17.8	鍋113-12
29	天縦殿扁額	1面	享保10年(1725)	縦80	横55	5代藩主鍋島宗茂筆/佐賀市指定重要文化財
30	藩主印章	23顆	江戸時代中期～後期			3代藩主鍋島綱茂・4代藩主鍋島吉茂ほか所用
31	唐螺石筆架	1口	江戸時代中期	高9.8	幅5.3	4代藩主鍋島吉茂 所用
32	螺石筆洗	1口	江戸時代中期	径15.5	高10.5	4代藩主鍋島吉茂 所用
33	紫圓硯石	1面	江戸時代中期	口径20.7	高1.8	4代藩主鍋島吉茂 所用
34	龍鳳硯墨	1本	江戸時代中期	縦14.1	横4.5	4代藩主鍋島吉茂 所用
35	直正公譜	1冊	明治11年(1878)	縦25.8	横18.4	鍋113-40
36	佐賀城御本丸差図	1鋪	天保6年(1835)	縦140	横124	
37	佐賀城御本丸差図	1鋪	嘉永年間(1848-54)	縦82	横80	
38	直正公譜	1冊	明治11年(1878)	縦25.8	横18.4	鍋113-40
39	鍋島直正書簡	1通	文久3年(1863)5月8日	縦17.3	横113.5	10代鍋島直正長女・貞姫宛て
40	黒漆塗菱紋行器	1対	江戸時代後期	高さ49.9	口径42.3	10代鍋島直正夫人・筆姫所用
41	黒漆塗菱紋食籠	1対	江戸時代後期	高さ30.5	口径36.9	10代鍋島直正夫人・筆姫所用
42	黒漆塗杏葉紋盥・湯桶	3点	江戸時代後期	(盥)高さ20.2	口径51.2	10代鍋島直正夫人・筆姫所用
43	(神野御茶屋)養老観桜宴	1幅	江戸時代後期(19世紀)	縦131.3	横29.2	古川與一 筆/古賀穀堂 賛

※所蔵はすべて財団法人鍋島報効会。

※鍋島文庫資料(財団法人鍋島報効会所蔵/佐賀県立図書館寄託)は、備考欄に「鍋113-40」のように請求記号を示した。

佐賀城築城四〇〇年記念

歴代藩主と佐賀城

編集・発行

財団法人鍋島報効会

〒八四〇・〇八三一

佐賀市松原二丁目五・一二

TEL 〇九五二・二三・四二〇〇

URL <http://www.nabeshima.or.jp>

発行年月日

平成二十三年九月二十六日

印刷

(株)佐賀印刷社

本書の全部または一部を無断にて転載・複製すること
を禁じます。

©二〇二一 財団法人鍋島報効会

Since 1611 SAGA Castle



徴古館

The Museum CHOKOKAN
NABESHIMA